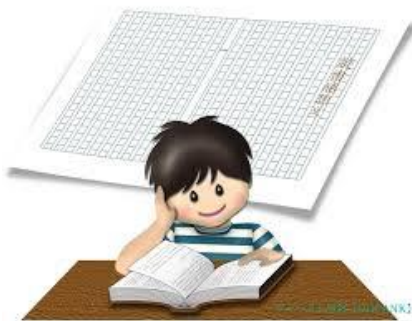


令和三年度

「高志の国文学」情景作品コンクール

入選作品集



令和3年度「高志の国文学」情景作品コンクール入選作品一覧表

○文芸部門

賞	題名	分野	学校	学年	名前	題材
知事賞	中学生	おおかみこどもから感じた自分の世界	富山市立堀川中学校	2	芳尾 美緒	おおかみこどもの雨と雪
	高校生	桜花	富山中部高等学校	2	若木 美来	万葉集

○文芸部門(散文・詩部門)

賞	題名	分野	学校	学年	名前	題材
金賞	中学生	八月二日を生きるとき	南砺市立南砺つばき学舎	7	前川 奈緒	八月二日天まで焼けた
	高校生	越中の風土を眺めて	高岡高等学校	2	山崎 菜々	万葉集
銀賞	中学生	本当の自分	高岡市立高岡西部中学校	1	上坂 粋生	竜とそばかすの姫
	中学生	おらっっちゃらっちやの富山弁	高岡市立高岡西部中学校	2	盤若 なな子	おらっっちゃらっちやの富山弁
	高校生	「I」の世界	高岡高等学校	2	上坂 大空	竜とそばかすの姫
	高校生	家持が愛した高岡	富山高等専門学校本郷キャンパス	2	石田 恵里奈	越中万葉百科
銅賞	中学生	「ドラえもん」から学ぶ	富山市立堀川中学校	1	木村 風雅	ドラえもん
	中学生	「おおかみこどもの雨と雪」の舞台	富山市立堀川中学校	1	市村 優奈	おおかみこどもの雨と雪
	中学生	未来を作り上げる	小矢部市立大谷中学校	1	保坂 颯良	ドラえもん
	高校生	私の夢	富山中部高等学校	1	神谷 真之介	ドラえもん
	高校生	匂いは時には記憶となる	高岡高等学校	2	荒木 一花	万葉集
	高校生	火	富山中部高等学校	1	高村 穂	八月二日天まで焼けた
佳作	中学生	おおかみと人間の在り方	砺波市立出町中学校	2	河邊 泰雅	おおかみこどもの雨と雪
	高校生	「北海」を読んで	富山商業高等学校	2	池田 侑加	北海

○文芸部門(短歌・俳句部門)

賞	題名	分野	学校	学年	名前	題材
金賞	中学生	富山の四季	片山学園中学校	3	平島 菜々子	おわら風の盆
	高校生	ホテルイカ	富山高等専門学校本郷キャンパス	3	山下 ゆい	富山の風物詩
銀賞	中学生	たくさんの場所にレッツゴー	南砺市立南砺つばき学舎	7	金道 琉真	ドラえもん
	中学生	日常	富山市立西部中学校	3	松田 珠希	富山なぞ食探検
	高校生	内川の風景	新湊高等学校	2	中野 実咲	映画「人生の約束」
	高校生	五箇山哀話 ～お小夜の物語～	富山高等学校	1	山田 梨緒	秘境越中五箇山
銅賞	中学生	豊かな富山	富山市立西部中学校	3	島 のりか	おおかみこどもの雨と雪
	中学生	ふるさととやまの美しさ	富山市立西部中学校	3	菅原 由梨	おおかみこどもの雨と雪
	高校生	螢火	高岡南高等学校	2	折本 心華	螢川
	高校生	薬師岳から	富山高等学校	1	河村 安珠	歌集 鷲
	高校生	千代の想い	富山高等学校	1	木村 嘉音	螢川
佳作	高校生	富山の風景	高岡高等学校	2	植原 佳奈	万葉集

※ 文芸部門は、知事賞以外は「散文・詩」「短歌・俳句」の区分ごとに賞を設定

○美術部門

賞		題名	学校	学年	名前	題材
知事賞	中学生	あいたい	富山市立速星中学校	2	地田 真也	逢いたい
	高校生	continue	富山中部高等学校	2	小林 夏萌	富山湾読本 富山湾を知る42のクエスチョン
金賞	中学生	富山大空襲	富山市立速星中学校	2	岡田 来未	八月二日、天まで焼けた 母の遺体を焼いた子どもたち
	高校生	夕焼けに遊ぶ	富山中部高等学校	2	砂子 承太郎	滑川市の自然
銀賞	中学生	冬暁	富山市立堀川中学校	3	田代 将鷹	庄川峡の変貌
		光が差しこむ花の家	富山市立速星中学校	1	高林 美咲	おおかみこどもの雨と雪
	高校生	神さぶ	富山中部高等学校	2	前澤 佐紀	とやま山ガイド10ジャンル10コース
		おいしさいっぱい富山	富山北部高等学校	1	川崎 愛恵	きまぐれオレンジロード、美味しんぼ
銅賞	中学生	雨晴らし	富山市立速星中学校	1	岡田 穰二	義経伝説～義経岩～
		「紗良」が「僕」と一緒にいる理由	富山市立速星中学校	2	松浦 采李	君の臍臓をたべたい
		夢	富山市立速星中学校	2	森内 結子	とべないホテル
	高校生	一期一会	富山中部高等学校	2	日吉 勇喜	とやま電車王国
		眺望	富山中部高等学校	2	尾崎 奏天	歴史のある寺
		還ろう	富山中部高等学校	2	山澤 愛実	もみの家
佳作	中学生	いろんな人々と花	富山市立奥田中学校	1	高島 鈴羅	万葉高志の国
		締めない心	富山市立速星中学校	3	宮本 陽世	劔岳 点の記
	高校生	つながり	富山西高等学校	3	中村 光愛	首里の馬
		ただ君に晴れ	富山中部高等学校	2	高山 諒	君の臍臓をたべたい

○写真部門

賞		題名	学校	学年	名前	題材
知事賞	中学生	明るい未来へ	小矢部市立大谷中学校	2	林 莉玖	ドラえもん
	高校生	あぶら火の光に見ゆる	富山中部高等学校	2	羽根 千絵	万葉集
金賞	中学生	笑おう！！	高岡市立牧野中学校	3	高橋 歩花	笑かせえるすまん
	高校生	楽しさ隣る滝の音	富山中部高等学校	2	尾崎 奏天	万葉集
銀賞	中学生	青空を駆ける	小矢部市立大谷中学校	2	高澤 伶綺	ドラえもん
	高校生	群青	富山中部高等学校	2	日吉 勇喜	おおかみこどもの雨と雪
		つばめの親子	高岡高等学校	2	井下田 萌加	おおかみこどもの雨と雪
銅賞	中学生	生きる美しさ	富山市立堀川中学校	2	氏家 雅晴	おおかみこどもの雨と雪
		水泡なる時	氷見市立北部中学校	3	松木 蘭々	万葉集第20巻 4470番歌
	高校生	蟻の思いも天に届く	泊高等学校	3	紙屋 羽海	富山わがまちここの一番
		隠れた想い	富山南高等学校	1	秋山 莉奈	おおかみこどもの雨と雪
佳作	中学生	雪が降ると	高岡第一高等学校	2	安土 空輝	詩集雪道「雪が降ると」
		大米騒動	小矢部市立大谷中学校	1	加納 彩音	大コメ騒動
		昔の人々に感謝して	小矢部市立大谷中学校	3	加納 涼成	劔岳 点の記

知事賞（中学生の部）

題材「おおかみこどもの雨と雪」

「おおかみこども」から感じた自分の世界

富山市立堀川中学校 二年 芳尾 美緒

自分の生きる道。それは、自分の決めた選択によって良くも悪くも変えることができる。しかし、その決断の壁を私たちはどう登り切ればよいのだろうか。

それを私に教えてくれたのは、「おおかみこどもの雨と雪」という映画だった。この物語の中にも大きな選択が迫った、不思議な運命を生きる二人の姉弟がいた。

この物語は、大学生の花と人間の姿で暮らしていた“おおかみおとこ”の間に生まれた好奇心旺盛の姉「雪」と、ひ弱で臆病な弟「雨」が「自分の世界」を見つけ出すまでを描いた作品である。「おおかみこども」として生まれてきた雨と雪に立ちはだかる大きな壁。それは、人間として生きるのか、おおかみとして生きるのかという選択だった。おとぎばなしのようなこの世界で下した雨と雪の決断に、私は今までにないくらい感動と勇気を与えられたのだった。

「周りの友達のように学校へ行く。」「みんなと同じ生活をしたい。」「これは雪の抱いた意志であった。一方、雨は「山で生きたい。」「人間が知らない世界を見つけ出す。」という思いを抱いていた。こうして、雪は「人間として生きる」道を選び、雨は「おおかみとして生きる」という道を選んだのだ。もし私だったら将来の選択をするときは、自分の利益や自分にとって幸せかなどを考えるだろう。しかし、雨と雪は違っていたのだ。おおかみの姿になってしまい、友達をケガさせてしまった雪は、「もうおおかみになって人を傷つけない。」という思いと、雨の「おおかみになって森を守り続けたい。」という思いから自分の人生の道を選択していたのだ。「自分のため」だけでなく、「他人のため」を考えたこの大きな選択に、雨と雪二人の強い心、私の弱さを感じ、心が大きく揺さぶられた。

私はこの映画の中で印象に残っていることが二つある。一つは、富山県を舞台とした作品の見事な情景描写である。

雨・雪・花の住んでいる山奥の家は、富山県上市町にある「花の家」が舞台となっている。「ギシギシツメキメキ」と音を立てる今にも崩れ落ちそうな古い床。緑が一面に生い茂った庭に、冬は夢のような銀世界の森。これらはまるで、静かに雨や雪たちを誘い込めかのような美しい風景の絵なのであった。

一つは、雨がおおかみとして旅立つ、最後のシーンだ。ある雨の日、森で迷い込んだ花を大人になったおおかみの雨が助け出す。おおかみの姿で森へ去ろうとする雨に花が叫ぶ。

「待って！まだあなたに何にもしてあげられてない！」
雨は一度振り返り、森を駆け登った。そして、
「ウォーーン。」

この声は、おおかみとして生きていく雨のちかいだと、私は思ったのだった。

この物語はここまでしか描かれていない。しかし、雨と雪は自分で選んだ道を一歩ずつ歩み、他人を大切に成長し続けている事だと思う。

私は今中学二年生。つまり、来年には「受験生」になる。そのため今抱いている夢に向かって雨や雪の選んだ道のように「他人のため」「自分の意志を大切に」高校を選び、たくさんの努力をしていきたいと思う。そして、今度は私が勇気をあげられるようになりたい。

自分の生きる道。それは、選択と決断からなっている。しかし、自分の意志と他人の幸せを大切にしたい人だけが登り切れる壁であろう。その壁の向こうには、必ず輝く「自分の世界」があることを、私は信じる。

知事賞（高校生の部）

題材「万葉集」

桜花

富山中部高等学校 二年 若木美来

真っ黒なワンピースに身を包んだ。滅多に着ないワンピースからは線香の匂いがした。シンプルなデザインがこのワンピースにはひっそりと黒い糸で薔薇の刺繍がしてある。密かに気に入っているが、この服はなるべく着ない方がいい服。

「花菜、準備できた？」

真っ黒な喪服姿のお母さんが、部屋に入ってきた。その、赤く腫れた目をわざと見ないふりをして、わたしは静かに頷いた。大好きだったおばあちゃんが死んだ。人が死ぬ、ということを目の当たりにした。今まで温かかったおばあちゃんの身体は、体温を失い、瞼は閉じたまま開かない。あったものが急に無くなる。それが、死ぬということだ。お通夜の前に、最後に握った冷たいおばあちゃんの手の感触をいまだに生々しく覚えてい

る。死は虚無。ふっと消えてしまうこと。

ほとんど白と黒しかない部屋に、一定の高さの声で読み上げられるお経が響く。こういうとき、どうしたらいいのかわからない。どういう顔をして、どういう風に座っているのが正解なのだろう。隣に座っているお母さんが再び涙をこぼしているのを見て、わたしも泣こうとしてみたが、一向に涙は出てこなかった。自分が、冷たい人間なのではないかと疑った。だけど、悲しいというのも違う気がした。もっと深い藍色の感情。きつと名前を付ければ途端に安っぽくなる気がして、これ以上何も言えないけれど、わたしの感情は、涙には変わらない。

葬儀を終えて、外に出た。一つの命が消えた翌日だというのに、外はやたらと良い天気だった。真っ青な空。晴れ空が好きだったおばあちゃんが自分の葬式の日くらい晴れがいいと神様に願ったのかもしれない。春先の少し冷たい風が吹いていた。

おばあちゃんの家には、一本の桜の木があった。お母さんが生まれた日に植えられたという。樹齢四十ほどのその木は、大きく枝を伸ばしていた。おばあちゃんは、家族の中で一番この桜を可愛がり、世話していた。わたしが、たまにおばあちゃんの家遊びに行く時、決まっておばあちゃんは庭で、桜の世話をしていた。その愛情を一身に受けて育ったからか、先達の細い枝の方には今、美しい薄紅のぼんぼりのような蕾がたくさんついている。この桜が咲くのをおばあちゃんは、もう見ることはない。ここに帰ってくることは、ないのだから。

ひらりと、と目の前を蝶が通っていった。飛ぶというよりも舞うというように、蝶は空に浮かんでいる。わたしはそっと目を閉じた。

乾ききった唇から歌が勝手にこぼれ出た。

吾背子が 古き垣内の桜花 いまだ含めり 一目見に来ね

大伴家持

【散文・詩部門】

金賞（中学生の部）

題材『八月二日天まで焼けた』

八月二日を生きるとき

南砺つばき学舎七年 前川 奈緒

「母の遺体を焼いた子供達」というサブタイトルにひかれて読み始めました。家にあった本ですが、そんな恐ろしいことが本当にあったのかと思ひながら読みました。戦争の話は描写が具体的なので、読むのが辛いという面もあるのですが、太平洋戦争の中を生きた普通の人の体験を理解する上で避けて通れない、と感じて頑張って読み終えました。

この本には、一九四五年八月二日の富山大空襲に遭った二人の方の体験談が綴ってありました。一人目は「十二歳で母を奪われ」の奥田史郎さんの話です。奥田さんは私と同じ十二歳で空襲に遭いました。富山の空を襲ったB29から降る焼夷弾の直撃弾にあたり、奥田さんのお母さんは死んでしまいました。お母さんに、焼け残った自分の布団をかけてあげるところがとても悲しかったです。奥田さんは、何日かして母の遺体を自分の手で焼いたそうです。私と同じ十二歳のときに、こんな凄まじい経験をしながら立派に生きてこられた奥田さんはとてもすごい人だなどと思いました。

二人目は「悲しみを捨てた町」という話の中山伊佐男さんです。富山大空襲に出会った時、中山さんは中学二年生でした。空襲の前に父を亡くし、東京大空襲に遭って富山に疎開してきたのに、また富山で空襲にあい、母と下の妹を失くされました。中山さんもまた家族の遺体を自分の手で焼いた人の一人です。この空襲の後、中山さんはもう一人の妹と生きてきました。いろいろなつらい目にあいながらも東京に戻り、大学に進み高校の生物の教師になられたそうです。

中山さんは前向きに立ち上がるすぐく強い力を持っている人だと思いました。この空襲の体験の後「人が生きていられるとどういふことか。」「人間の生命力とは何なのだろうか。」「人生とは何なのだろうか。」「幸福とは何を指すのだろうか。」「といった人間の根源的な疑問を持つようになったとありました。

この本では、最後に「ガラスのうさぎ」という戦争体験記の本を書かれた高木敏子さんと三人での対談が書かれています。高木さんも奥田さんや中山さんと同じ体験をされている方です。この本には、三人が三十年以上も誰にも言えなかった思いを語りあったとありました。三十年たっても心の中から消えない思いというのは、想像もできないようなつらい悲しみであったと思います。

わたしも、もしもこの戦争のときに生まれていたら、自分の家族の遺体を焼くようなすさまじいつらい体験は、思い出したくないし誰にも言えないと思います。三十年以上もたつてようやく話せる相手が見つかり話せるようになってよかったです。と思いました。

わたしがこの本を読んで一番心に残ったのは伊佐男さんの「本にかぎらず、目に見えるもの、手でふれられることのできるものは、いつかは滅びてしまう。今日そこにあっても明日はもうなくなってしまうかもしれない。では、ぼくは何の存在を信じて生きていったらよいのかー？」というところです。目に見えるもの、手で触れることができるものは、もしかしたら家族かもしれないし、友人、宝物、そして自分かもしれない。

今はいるかも知れないけれど、明日にはなくなっているかも知れないことが本当に起こり、何を信じていいのか分からなくなる気持ち少し分かった気がしました。

また、戦争とはとても恐ろしいもので、絶対にしてはいけないものだと分かりました。戦争を経験した方が少なくなってきた今、自分から知ろうとすることが必要だと思います。これからも戦争のことを読んだり、聞いたり、見たりして、戦争のない平和でみんなが安心して暮らせるような時代がずっと続くようにみんなを取り組んでいきたいと思いました。

金賞（高校生の部）

題材『万葉集』

越中の風土を眺めて

高岡高等学校二年 山崎 菜々

富山県民は皆、立山が好きだ。そんなことはなかった。

夏。頂上がどこかもわからない長く険しい道、いつ落石があってもおかしくない危険な道。足を踏み外してしまふなんてこともないとは限らない。それでも登らされた。道すがら何度も死を連想してしまい、赤ちゃんに戻ったように泣きじゃくる私は先生に手を引かれ頂上に到着した。

「立山に降り置ける雪を 常夏に見れども飽かず 神からならし」越中に赴任する前、都で聖武天皇の内舎人として仕えていた大伴家持は、国守として越中に赴任して初めて夏であるにも関わらず白い雪が降り積もっている立山を見た。その自然の不思議さにたいそう驚いただろう。それもそのはず。自分の肌で感じる季節と視覚で感じる季節が異なっているのだから。そして、夏中見ているも飽きることはないくらいだと感動し、神山の名にそむいていないと評価している。さらに、家持が越中に赴任した際の境遇を学習すると驚くべきことがたくさんあった。この歌を詠んだのは赴任してからまだ一年もたっていないころであった。その上、越中に赴任した翌月にたった一人の弟である書持と死別している。家持自身も相当重い病にかかったそう。その寂しさや不安、悲しさは簡単に癒えるものではないし、当時は望郷の念にかられたり、虚無感に襲われたりするともあったと思う。それに加え、地方官としての仕事や責任もあり、家持の精神は今にも限界をむかえそうだったにちが

いない。しかし、そんなマイナスイな感情を一切感じさせない。ありのままの立山の姿に魅了され、生命力に励まされたのであろうか。

当の私はというと、恐怖の日から立山を意識的に眺めることがなくなつた気がする。立山を見るたび、立山を想像するたび、悪夢のような恐怖を思い出すのを避けようとしているからなのかもしれない。しかし、小学校でも中学校でもそして今も校歌を歌うと必ず口ずさむのは立山の様子だった。つまり、立山は私にとって身近な存在だったのだ。山に降り積もつた雪が光となり、山が光となる神秘的な立山。山並み高く空にそびえたつ堂々とした立山。ああ、私の故郷にはこんなにも美しく荘厳な自然があったのだ。私が生まれる何千年も前からずっと越中を、富山県を守ってきたのだ。そしてこれからも。今さらながらにそう感じた。途端、過去の体験を言い訳にして立山を拒絶する自分が情けなく、腹立たしく感じた。富山県民が富山県を代表する大山脈を愛さないでどうする。

いつからか、私の中で立山は単なる背景でしかなかった。これは立山に限った話ではない。二上山や射水川、奈呉の海、三島野、岩瀬野なども、家持に大きな影響を与えた越中を代表する風土であるが、現在は私たち人間の生活にばかりフォーカスが当てられて、多くの自然そのひとつひとつも主人公であることを忘れがちだ。ありのままの自然は人の心を動かす力を持ち、人の心に寄り添うこともできる主人公のひとりだ。ふと、家持が見た景色を見たくなくなった。

私はこの夏、大伴家持が詠んだ歌と出会えてよかったと思う。今日も立山には白い雪が降り積もっているだろうか。外に出て久しぶりに眺めてみよう。私たちが誇る神宿る立山を。

銀賞（中学生の部）

題材『竜とそばかすの姫』

本当の自分

高岡市立高岡西部中学校一年 上坂 粹生

何かが足りない

三日月の欠けた部分

三日月はUのカタチ

欠けているものは何？

失った歌声？

それとも踏み出す勇氣？

もうひとりの私は歌う

怯えていた竜の心をとかすために

もうひとりの私は歌う

本当の自分を取り戻すために

三日月は満月になる

欠けていた部分は見えていなかっただけ

本当の自分はいつだって自分の中にある

私は歌う

明日を強く生きるために

銀賞（中学生の部）

題材『おらっちゃんらっちゃんの富山弁』

おらっちゃんらっちゃんの富山弁

高岡市立高岡西部中学校二年 盤若 なな子

最近じゃあ、テレビもスマホも標準語

標準語もいけどき

なーんかちよっこし堅苦しい…

ふしぎやな

“バカ”言われたら腹が立つけど

“ダラ”と“アホ”ならそうでもない

これが方言のなんともいえない魅力の一つ

こんなにあったかい言葉

きっと他には存在しない

意外と使っている方言

案外身近なもんかもしれん

可笑しい方言 可愛い方言

個性的で魅力的

人と人との心を繋ぎ

故郷の懐かしさを思わせる

そんな方言やからこそ

ずっと大事にしていたい

ふとした瞬間パッと飛び出す

おらっちゃんらっちゃんの富山弁

銀賞（高校生の部）

題材『竜とそばかすの姫』

「U」の世界

高岡高等学校二年 上坂 大空

「U」の世界へようこそ

異世界への扉は突如開き、そこには憂鬱な現実世界とは正反対の眩い光に照らされた近未来的超高層ビルが立ち並ぶ。幾つもの白いU粒子が変化した多種多様でカラフルなAs達は楽しそうに遊泳している。誰もを魅了する美しい仮想空間「U」。ログインした私はあらゆる者を寄せ付けない堅固な鎧を身に纏い、美しい街をただ一人彷徨う。

鈴のお母さんは鈴が幼い時、川の中州へ取り残された女の子を助けに行って亡くなってしまった。鈴はこの出来事がきっかけで、お母さんとの思い出が深い、大好きだった歌が歌えなくなるトラウマを抱えてしまった。しかし、「U」の世界ではベルとして歌を取り戻し世界中の人に向けて堂々と歌うことができるようになった。「U」の世界を通じて得た自信と経験は現実世界でも新しい一步を踏み出す勇気を与え、本当の自分自身つまり鈴として歌を取り戻すことができた。「U」の世界でアンベイルとして本当の自分を晒すことも恐れず、孤独な竜の支えになろうと手を差し伸べ、その心を開いた。鈴のお母さんが困っている女の子を命がけで助けようとした優しい気持ちは鈴の中にもすっかり育っていた。欠けた三日月が満月になるように本当の姿は本人にしか分からない。「U」の世界であろうが、現実世界であろうが本当の自分を見つけたせるのは自分自身しかいないと鈴の歌声は教えてくれた。

この一年、私は人と距離を取り、本当の顔を隠して過ごした。私以外の人も顔は布で覆われ、その眼差しはどこか鈍く遠くを

見つめているようだった。この生活がいつまで続くのか、考えただけで息が詰まり鬱々とした気分は私を鈍色の世界に引きずり込んでいたが「U」の世界で成長した鈴の歌声を聞き、私は鮮やかな現実世界へ飛び立つ勇気をもたらした。

朝のラッシュをすり抜けて母の車で学校へと向かう。高架橋を上へ上へと上がる途中、体が浮いて斜めになりながらも携帯を見ていたが、昇りきった瞬間、ふと顔を上げると今にも手が届きそうな所に悠々と立ち並ぶ真っ白な立山が眼前に広がっていた。「U」の世界とは180度異なる自然美だ。現実世界には変わらない美しいものがある。鈴の美しい歌声やお母さんから学んだ優しい心のように。私の中でも変わらないものを見つけよう。顔を上げてしっかり見渡せばマスクの下で微笑みかけてくれるたくさんの友達やあたたかい家族がいる。心を癒してくれる美しい故郷の自然がある。

《現実はやり直せない。でも「U」の世界ならやり直せる》
「U」の世界のアナウンスがこだまする。本当にそうだろうか？新しい世界へ踏み出す勇気さえあれば、「U」の世界でなくとも、もうひとりの新しい自分、本当の自分を生きることができれば、のだと私は思う。本当の自分は自分自身で見つけなければ。もう二度と私は「U」の世界で一人彷徨うことなく、美しい街並みを遊泳できる、そんな気がした。

私は母がアイロンをかけたパリッとした襟の制服を身に纏い、現実世界へ降り立つ。
《さあ、新しい人生を始めよう》

「いくぞっ」
私は心の中で気合いを入れ、笑顔でしっかり前を向き、校門へ向かって歩き始めた。

ここ現実世界。「U」私の世界。

銀賞（高校生の部）

題材『越中万葉百科』

家持が愛した高岡

富山高等専門学校

本郷キャンパス二年 石田 恵里奈

「ものこのふの八十娘子らが汲みまがふ

寺井の上の堅香子の花」

艶やかな万葉衣装に身を包み、なじみの深い家持の歌を読む。三年前の万葉朗唱の会での出来事だ。二度目の参加であったが、奥ゆかしく幻想的な雰囲気にもまれながら水上舞台に立つと、まるで千三百年前にタイムスリップした気分になる。

高岡万葉まつりは、万葉集の代表歌人である大伴家持が奈良時代に国守として在任していたことから、万葉ふるさとづくりに取り組んでいる高岡市の代表的な行事の一つとなっている。万葉集四千五百十六首をリレー方式で高らかに朗唱する一大ページェントは、県内外から多くの来場者があるが、最も心を惹きつけられるのはやはり万葉ロマンとドラマチックなステージではないだろうか。

私が万葉集に触れたきっかけは姉が愛読していた「越中万葉百科」という一冊の本に出会った時だ。それまで歌といえば姉妹三人で百人一首で遊ぶのがお正月の恒例行事だったが、いつの間にか物足りなくなり代わり始めたのが万葉かるただった。

日本で最も古い歌集といわれる万葉集だが、それまで私は万葉集という単語を知っていた程度で、どのようなものかは理解できていなかった。しかし、かるたを通して歌の数だけ当時の人々の喜び、悲しみ、辛さが感じとれ万葉集は私たち日本人の常に身近に存在し深く関わっていることがわかった。中でも最も多くの歌を残した歌人・大伴家持の政治的、幻想的な歌に心

を打たれ興味が湧き、この夏家持の素顔を見つける旅に出た。高岡市には家持の歌碑や銅像が数ヶ所建てられており、勝興寺・万葉歴史館・雨晴海岸など家持にゆかりのある歴史的な文化遺産が整備され、隣接する市などに万葉にちなんだ歌枕がたくさんある。

家持の歌を鑑賞しながら進むと私の一番のお気に入りの歌に出会う。

「馬並めていざ打ち行かな渋谷の

清き磯廻に寄する波見に」

越中万葉といえれば必ず挙げられる家持が愛してやまない越中の雄大で美しい自然を身近に感じとれる歌である。高岡で生まれ育った私にとって家持の歌は、万葉ゆかりの地の素晴らしさを共有でき郷土の良さを再確認させてくれる。そして見ず知らずの土地へ赴任した家持が高岡を歌を通して愛してくれたことに感銘し私の旅は終わった。

万葉集を典拠とする元号「令和」の時代となり今年で三年目を迎える。家持のまとめた万葉集は家持とともに生き続けている。その歌を読むことは、家持とともに生きることだ。万葉集に収められた家持の歌は高岡の「ふるさと文学」の原点ともいえ、現在も親しまれている。都の政手から離れた心のゆとりにより豊かに歌境が開いた「越中万葉」そして家持が愛したこの高岡の地を思う心を大切にしていかなければならない。

高岡市は、深緑と清らかな水に包まれ豊かな自然と歴史、文化に包まれ人と人がつながる市民都市だ。また北陸新幹線が開通し、毎日大勢の観光客で賑わっている。そして魅力あるまちづくりを推進するため、さまざまな取り組みを行っている。

現在の高岡の姿を家持が見たらどう思うだろう。きっとますます高岡を愛し多くの歌を残したにちがいない。あくまで私の想像し、描いた姿になるのだが……。

銅賞（中学生の部）

題材「ドラえもん」

「ドラえもん」から学ぶ

富山市立堀川部中学校一年 木村 風雅

僕が「ドラえもん」に関心を持つようになったのは、小学生にもなっていないころに、祖母の家でドラえもんの一冊の漫画を見つけたことがきっかけだ。今から六年以上も前なので、よく覚えていないが、その頃はドラえもんのテレビで放送されているアニメすら知らなかったもので、珍しかったのだと思う。

それから僕は、本屋にでかけて「ドラえもん」の気に入った漫画を買ったり、毎年映画の「ドラえもん」を家から少し離れた映画館に見入ったりしていた。そのくらいに「ドラえもん」が好きだったのだ。

この「ドラえもん」は、今や日本で知らない人はいないと思うくらいに人気の作品であり、アニメや映画も作成され続けている。また、最近のアニメはキャラクターが綺麗になり、ギャグが面白くなった。しかし、この「ドラえもん」シリーズの本当の良さと面白さは、僕たちが思わないようなところにあるのだ。

まず一つ目に、「日常の中の非日常」という「ドラえもん」の作品で共通している特徴がある。

例えば「ドラえもん」でよくある日常は、「のび太が乱暴者のジャイアンにいじめられてドラえもんに泣きついて助けを求めろ」というものだ。これは、「ドラえもん」シリーズの中でも日常と言えるだろう。

そして、非日常とは、「ドラえもん」が、現実には存在しないままで夢のような秘密道具をポケットから取り出し、それを使っ

てのび太を助ける」というものだ。これは現実では考えられないから、日常ではない。これこそが非日常だ。

つまり、「日常の中の非日常」とは、何気ない日常の中にそっと「不思議」や「夢」がねじ込まれているということだ。これは、話に入り込みやすくなる、「ドラえもん」シリーズの一つの特徴である。

次に、「物語から学ぶ」という良さがある。これは、「ドラえもん」に限ったことではない。しかし、「ドラえもん」で学ぶことができることは、ほかの漫画やアニメとは違い、普段あまり考えないようなことを教えてくれるのだ。

例として、「ドラえもん」の作品の中で、「便利さだけでは必ずよい結果にならない」ということを学ぶことができる。これは、様々な「ドラえもん」の作品で学ぶことができる。

例えば、「のび太」はたまにドラえもんに借りた道具をいたずらやずるに使うとする。しかし、必ずと言っていいほど、その計画は失敗するか、のび太自身があきらめることになるのだ。

つまり、道具を使った結果は、道具の機能や性能だけではなく、使った本人の考えや使い方によって決まるので、その道具を使う本人がよく考えないといけないということ。こんな普段は思わないことを「ドラえもん」は教えてくれるのだ。

このような「ドラえもん」シリーズは、漫画で一九六九年に連載を開始した作品なので、昔の考えや表現、文化が残っている部分も多い。だからこそ、昔よりも人気になった今は考えもしないようなアイディアや、教訓を知ることができる。また、昔から現代へ受け継がれる一つの文化として、「ドラえもん」を含めた漫画たちが、これからの生きるヒントになるのではないかと考えた。

だから、現実が「ドラえもん」の未来のような世界になっても、「ドラえもん」を読み続けて、自分の学びとして、大切にしたいと思った。

銅賞（中学生の部）

題材『おおかみ子どもの雨と雪』

「おおかみ子どもの雨と雪」の舞台

富山市立堀川中学校一年 市村 優奈

私は小学校五年生の時に、お父さんの転勤で、福島県から富山県へ引っこしました。中学一年生になった今、私が小さいころに見た大好きな映画、「おおかみ子どもの雨と雪」の舞台モデルが富山県だったことを知ってとても驚きました。富山県のどこが映画のモデルで使用されているのか知りたくなり、調べてみることにしました。

「おおかみ子どもの雨と雪」の家のモデルになった「おおかみ子どもの花の家」に行ってみることにしました。行ってみると、そこには、もうたくさんの観光客がいて、「花」の家の中を見していました。この「おおかみ子どもの雨と雪」は公開してから九年もたっているのにまだまだたくさんの人に愛されているんだなとその人達を見ていて思いました。私も家に入ってみると、お母さんと子どもたちで入っていたおふろや、キッチン、そして「雪」が小学校低学年のときに友達に見せていたヘビやカエルが入った宝箱などが映画そっくりに置いてありました。花の家に行って、本当に映画そっくりだったので、近くに「雨」と「雪」と「花」がいるのではないかと思ってしまうほどでした。

次は称名滝に行きました。称名滝は、山の勉強をしている「雨」とキツネの先生が立ち寄ったところですが、私が行ったときは、きりだらけで滝が全く見えなかったのですが、少し時間がたっ

たら少しずつ、きりが晴れて、滝が見えてきました。滝が予想以上に高かったのも、とてもおどろきました。また、富山県にこんなきれいな滝があることを知ることができました。そして、映画では滝のふもとがうつっています、実際に滝のふもとを見てみると、本当におおかみが出てきそうでした。

最後に立山の室堂に行って、チングルマを見に行きました。チングルマは映画の最初に「花」が寝ていた場所にたくさん咲いた花です。少ししか見つけることができなかったけど、とてもきれいで、感動しました。また、もしチングルマがたくさん咲いているところがあったら、映画の「花」のようにその上で寝てみたいと思いました。

「おおかみ子どもの雨と雪」で出てきた場所に行ってみて、大自然の美しい場所が映画で登場していることを知り、驚きました。そして、「おおかみ子どもの雨と雪」に、富山の美しい自然がかがかれています。ほこらしい気持ちになりました。

また富山県にはたくさんの美しい自然がいっぱいあることを改めて

知ることができました。これから、まだまだたくさんある富山の自然を見に行きたいし、この美しい自然を大切にしていきたいと思いました。

銅賞（中学生の部）

題材『ドラえもん』

未来をより上げる

小矢部市立大谷中学校一年 保坂 颯良

タイムマシンがあれば
高岡の未来が見える
でも

現実を見よう

そのような機械はない

未来も見えない

でも それでいい

高岡の未来を

見てもおもしろくない

高岡の未来は

自分たちで作る

からおもしろい

銅賞（高校生の部）

題材『ドラえもん』

私の夢

富山中部高等学校一年 神谷 真之介

私には、幼いころ夢があった。それは、ドラえもんを作ってみんなを笑顔にすることだった。週に一度、ドラえもんのアニメが放送される金曜日は、楽しみで仕方なかった。もちろんマンガも大好きだったし、家にはドラえもんのグッズが山のようにあった。

小学生になってもドラえもんへの思いは冷めることはなかった。ドラえもんの形をした貯金箱や、ドラえもんのアニメの曲が流れるオルゴールなど、宝物はドラえもんのものばかりだった。そして、私は小学校四年生になり、とある行事で、将来の夢を発表することになった。どんな夢にするべきか迷った結果、「発明家」という夢にした。ドラえもんを発明したいと思ったからだ。しかし、発明家が本当に私のやりたいことかと聞かれても、よく分からなかった。

中学生にもなると、なんとなく、根性もなく勉強もたいして得意ではない私にはドラえもんは作れないのだと感じ始めた。部活動は小学校からの友だちと同じ部がいいという理由で、美術部に入った。作品を描いて受賞されることはあまりなかったけれど、美術室の隅っこで、好きなアニメやマンガ（もちろんドラえもんも）のキャラクターを描いて楽しんでいった。

高校生になり、進路希望を書くことになった。今までただひたすらに「ドラえもんを作ってみんなを笑顔にしたい」などと思ってきたけれど、よくよく考えてみると、具体的にどんなところで働くのか、そこで何をしたいのか、現実的なことが何ひとつ思い浮かばない。みんなが夢に向かって進んでいる中で、

まだ何も無い自分に焦りがこみ上げてきた。

高校生になっても部活動は美術部に入った。ある日、休み時間、好きなマンガのキャラクターを描いていると、高校に入って友達になった同じ美術部の楓花が話しかけてきた。

「有紗、今週の土曜って空いてる？」

訳も分からずうなずいた私が連れて来られたのは『まんが博物館』という新しそうな建物だった。

「じゃあ、入ろっか。」

楓花が明るく言った。二人だけで少し気まずいなあと思っていたけれど、中に入るとそんな不安は吹っ飛んだ。

「すごい」

思わず口に出してしまった。ずらりと並んだマンガの数々。

特別展でドラえもんの特集が組んであった。そこにはドラえもんの原画などが飾ってあった。そんな中、ひときわ目を引いたのは、ドラえもんの作者、藤子・F・不二雄先生の、実際の仕事道具だった。ここからあのドラえもんが作られたと思うと、すぐドキドキして不思議な気持ちになった。

「ねえ、有紗」

展示に見入っていると、少し改まった声で話しかけられた。

「どうしたの？」

「私とマンガ描いてくれないかな。有紗が、ドラえもんを楽しくそうに描いているのを見て、『これだ』って思ったんだよね。実は私、ドラえもんみたいな、人をわくわくさせるマンガを描くのが夢なんだ。」

そう言っって楓花は照れ臭そうに笑った。

「うん。私も楓花と描きたい。」

反射的に言葉が出た。全身に身震いを覚えた。そうか、私のやりたいことってこういうことだったんだ。もちろん、うまくいかないかもしれない。でも、漫画を描いてたくさんの人に夢を与えたい。私が与えられたみたい。心からそう思った。

銅賞（高校生の部）

題材『万葉集』

匂いは時には記憶となる

高岡高等学校二年 荒木 一花

37・9℃

体温計に映る数字を見て、はあ、とため息とも取れる熱い息が漏れる。雲ひとつない晴れた気持ちの良い休日のはずなのに心も身体も怠くて気持ちが悪い。とびきりのオシャレをしている母親は私を心配して随分と前から楽しみにしていた自分の予定をキャンセルしようとしてくれたけれど、今日は大事な日なのでしょ、なんて見栄を張って笑顔で見送ってしまった。薬を飲んで蒸し暑い布団の中に潜り込むと、思ったよりも辛い夏風邪に咳が出て、瞳に薄く水の膜を張ったことに誰もいないのにあわてて目を閉じる。

毎日、満員電車の中で俯いてスマホを眺める皆に自分も仲間入りし、ロボット化していく社会に押し潰されないように何とか笑顔を取り繕う。よくこんな環境で過ごしてきたものだ。一人になって漸く実感し、零れてきそうな涙を必死に堪える。息苦しさに耐えきれず布団から顔を出すと、人通りが少なくなるこの時間は車のエンジン音も人の慌ただしい声も聞こえない。部屋にはうるさく鳴いている蝉の声だけが響く。おかげで自分の苦しそうな呼吸音がかき消され、辛い心から少しでも気を逸らしてくれているようで今回ばかりは有難い。自然の音だけが残る部屋はまるで自分が社会から切り離されて自由な子供にでもなったようだ。

幼い頃は泣き虫で今よりもずっと身体が弱く、体調を崩してばかりだった。女手一つで家庭を支えるために、いつも忙しそうにしている母親がその時は特に世話を焼いてくれることが嬉

銅賞（高校生の部）

題材『八月二日、天まで焼けた』

火

富山中部高等学校一年 高村 穂

しくて一日中甘えていたんだっけ。鼻づまりのはずなのに、窓から吹き抜ける生暖かい風が運んできた「匂い」にとてつもな
く懐かしさを覚え、息をつく暇もない社会によって閉じ込めら
れていた思い出が自然と幾つも瞼の裏に映し出される。

少しだけ冷たい夜の風の匂い。祖父母の家で祖母に手招かれ
て見た裏庭の用水路から点々と覗くホタルの光。

炎天下に吹く息苦しい風の匂い。大きな虫取り網を持つ兄と
一緒に捕まえた、大きな木に留まる小さなカブトムシ。

震えるような寒さが乗った風の匂い。面倒臭そうな顔をして
いる母親を外に連れ出して自慢した、自分の体より大きな雪だ
るま。

ああ、思い出した。まだ見ぬ世界に胸を膨らませていた毎日
とその幼い探求心を。無数にいる人間から見れば、たった一人
の小さな子供のワンシーンかもしれないけれど、それらは“私”
にとってかけがえのない幸せだったのだ。

しかし、私は変わってしまった。少しずつ零れ落ちてい
た幸せに目を向けることすらしないで現在を生き、未来を考え
るだけで精一杯だった。これからは忘れないから、大切なもの
は大事にするから、幼い頃の私は変わってしまった今の私を許
してくれるだろうか。眠りに落ちるその瞬間、一粒の涙が頬を
流れた――

夕刻を告げるヒグラシの音が聞こえる。睡眠とは偉大なもの
で、目が覚めると大分楽になった身体でベッドから起き上がる。
そっと開けたカーテンの隙間から赤らんでいる空を見上げると、
あの頃と変わらない情景に、私を受け入れてくれた気がして、
また目頭が熱くなった。

止まることなく変化していく社会の中で、“泣き虫な私”と“匂
いの記憶”だけが変わることなく残された世界に新しい風が吹
く。暖かい陽の光の柔らかさを混ぜた風の匂いを感じた日には、
きっと今日を思い出すのだろう。

夜空に煌めく花火を 暑さも忘れ
静かに見つめる私は 思い出す
いつか曾祖母から 聞かされた話

富山を焼いた 猛然たる炎は

夜空を真っ赤に染めて 隣県の岐阜からも

その惨憺たる状況が 窺えたこと

あの日の出来事を 私は忘れない

心に決めた 八月一日

瞳に映った輝きに 平和を願った

佳作（中学生の部）

題材『おおかみこどもの雨と雪』

おおかみと人間の在り方

砺波市立出町中学校二年 河邊 泰雅

「おおかみこどもの雨と雪」

これは、おおかみ男と人間「花」の間に生まれたおおかみこどもの「雨」と「雪」の成長を描いた物語である。また、人間界でどう成長していけば良いのか葛藤していく姿が印象的な物語である。

この作品の魅力一つ目は、二つの生き方に対する「雨」・「雪」のそれぞれの向き合い方である。

「雨」は、消極的で、人間の世界には順応できずにいた。一方で「雪」は、積極的で様々なことに興味を持ち、学校に行くなど人間としての道を歩んでいた。物語の中では、おおかみとして生きようとする「雨」と人間として生きようとする「雪」の考え方の違いから起こった争いの様子も描かれている。このシーンには、現実の世界でも当てはまるメッセージが込められていると考えた。それは、自分の生き方は自分で決めてそれを貫いてほしいというものである。僕は、雨と雪がそれぞれの世界を見つけ、そこで生きると決心したことで争いが起こったと考えたため、このようなメッセージがあるのだと感じた。

作品の魅力二つ目は、親としての在り方だと思う。僕はまだ中学生のため、本当の親とはどのようなものかは想像しにくい。しかし、この作品に出てくる「花」を見てみると親の気持ちに近付けるような気がするのだ。僕は雨が山へと旅立つシーン、

及び、花の

「しっかり生きて。」

という言葉からそのような印象を受けた。花は、最初、雨が山に行くことを反対していた。そこには、雨に安全に生きてほしい、成長を見届けたいという花の想いがあったと思う。しかし、このシーンでは、旅立つ雨に対し、花は激励の気持ちを込めて見送っていた。ここで僕は、子供が未来へ歩んでいくのを手助けすることが親として本当にするべきであるということに気付いた。だから、自分が親になったときには、自分の考えを押し付けすぎず、子供の意見を尊重して成長していくのを時には助け、見届けていこうと思った。そして、子供が旅立つ一つの区切りが訪れれば、

「しっかり生きて。」

というような温かい言葉がかけられるようになりたいと思った。このように、「おおかみこどもの雨と雪」では、「おおかみこども」という形で人間の生涯で大切なことが伝えられている。他にも細田守監督の想いが込められたシーンが作中に散りばめられている。

この作品は、細田守監督の地元ここ富山を舞台としており、富山ならではの情景に触れることもできる。

そのようなポイントに注目しながら「おおかみこどもの雨と雪」を見てほしいと思う。

佳作（高校生の部）

題材『北海』

「北海」をよんで

富山商業高等学校二年 池田 侑加

「北海」という詩から私は、富山の低いところにあるどんよりとした暗い雲がある曇り空の向こうに、実は太陽がキラキラとメラメラと輝いているようすをイメージした。

この詩を読んで私は、実は見えていないけどしっかりと輝いているものがあるのに自分の思考を止め、ないものだと思ってしまう内容より、見た目や周りの環境等から、思いこみや評価、結論を出すのではなく視野を広げて考え方を変えることで真の大切なものを見つけ気付くことができるのだという富山と人間の思考のつながりがあることに気づいた。また、低いところにあるいまにも落ちてしまうというようすより、そのどんよりとした雲は人生の障害物であり、その障害物を乗り越えることで広く自由な人生があるのでないかと思った。

この「北海」という詩を通して、見えないところにも目を向けて人生の可能性を広げていくことが大切だと思った。

【短歌・俳句部門】

金賞（高校生の部）

題材『富山の風物詩』

ホタルイカ

富山高等専門学校

本郷キャンパス三年

山下 ゆい

金賞（中学生の部）

題材『おわら風の盆より』

富山の四季

片山学園中学校三年 平島 菜々子

蛍烏賊

ホタルイカ

編笠を

銀河を纏い

まとい

涼風なせる

いのちつ
生命継ぐ

坂の町

銀賞（中学生の部）

題材『ドラえもん』

たくさんの場所にレッツゴー

南砺つばき学舎七年 金道 琉真

国境は

いつかだれかが

引いたもの

どこでもドアは

世界をつなぐ

銀賞（中学生の部）

題材『富山なぞ食探検』

日常

富山市立西部中学校三年 松田 珠希

目が合って

口に運べず

ホテルイカ

銀賞（高校生の部）

題材 映画『人生の約束』

内川の風景

新湊高等学校二年 中野 実咲

湊町

凜と並んだ

曳山に

吹く風やさし

まつつんの朝

銀賞（高校生の部）

題材『秘境越中五箇山』

五箇山哀話 〱お小夜の物語〱

富山高等学校一年 山田 梨緒

五箇山の

夜霧に濡れて

流刑小屋

銅賞（中学生の部）

題材『おおかみこどもの雨と雪』

豊かな富山

富山市立西部中学校三年 島 のりか

積雪後

白に飛び込む

笑い声

銅賞（中学生の部）

題材『おおかみこどもの雨と雪』

ふるさととやまの美しさ

富山市立西部中学校三年 菅原 由梨

米炊けて

ふふふとほほ笑む

秋の暮

銅賞（高校生の部）

題材『螢川』

螢火

高岡南高等学校二年 折本 心華

この川を

故郷と呼ぶ日が

近いのを

知ってなお行く

螢火のなか

銅賞（高校生の部）

題材『歌集 鶯』

薬師岳から

富山高等学校一年 河村 安珠

天日は

夏の薬師の

雲中を

密かに昇れど

暁と照らす

銅賞（高校生の部）

題材『螢川』

千代の想い

富山高等学校一年 木村 嘉音

三つ糸の

響き螢と

流れゆく

佳作（高校生の部）

題材『万葉集』

富山の風景

高岡高等学校二年 植原 佳奈

立山に

残雪映えて

明日も晴れ



知事賞(中学生の部)

「あいたい」〈題材「逢いたい」〉

富山市立速星中学校2年 地田 真也



知事賞(高校生の部)

「continue」〈題材「富山湾読本 富山湾を知る42のクエスチョン」〉

富山中部高等学校2年 小林 夏萌



金賞(中学生の部)

「富山大空襲」

〈題材「八月二日、天まで焼けた 母の遺体を焼いた子どもたち」〉

富山市立速星中学校2年 岡田 来未



金賞(高校生の部)

「夕焼けに跳ぶ」〈題材「滑川市の自然」〉

富山中部高等学校2年 砂子 承太郎



銀賞(中学生の部)

「冬暁」〈題材「庄川峡の変貌」〉

富山市立堀川中学校3年 田代 将鷹



銀賞(中学生の部)

「光が差しこむ花の家」〈題材「おおかみこどもの雨と雪」〉

富山市立速星中学校1年 高林 美咲



銀賞(高校生の部)

「神さぶ」〈題材「とやま山ガド10ジャンル10コース」〉

富山中部高等学校2年 前澤 佐紀



銀賞(高校生の部)

「おいさいっぱい」の県「富山」

〈題材「きまぐれオレンジロード、美味しんぼ」〉

富山北部高等学校1年 川崎 愛恵



銅賞(中学生の部)

「雨晴らし」〈題材「義経伝説～義経岩～」〉

富山市立速星中学校1年 岡田 稷二

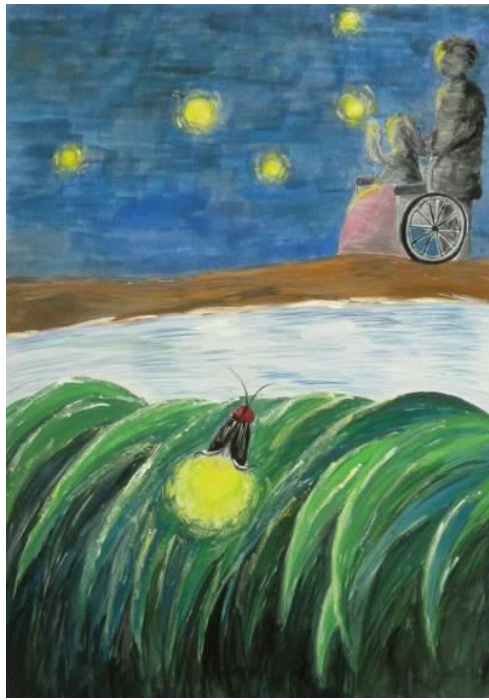


銅賞(中学生の部)

「「紗良」が「僕」と一緒にいる理由」

〈題材「君の臍臓をたべたい」〉

富山市立速星中学校2年 松浦 采李



銅賞(中学生の部)

「夢」〈題材「とべないホタル」〉

富山市立速星中学校2年 森内 結子



銅賞(高校生の部)

「一期一会」〈題材「とやま電車王国」〉

富山中部高等学校2年 日吉 勇喜



銅賞(高校生の部)

「眺望」〈題材「歴史のある寺」〉

富山中部高等学校2年 尾崎 奏天



銅賞(高校生の部)

「還ろう」〈題材「もみの家」〉

富山中部高等学校2年 山澤 愛実



佳作(中学生の部)

「いろんな人々と花」〈題材「万葉高志の国」〉

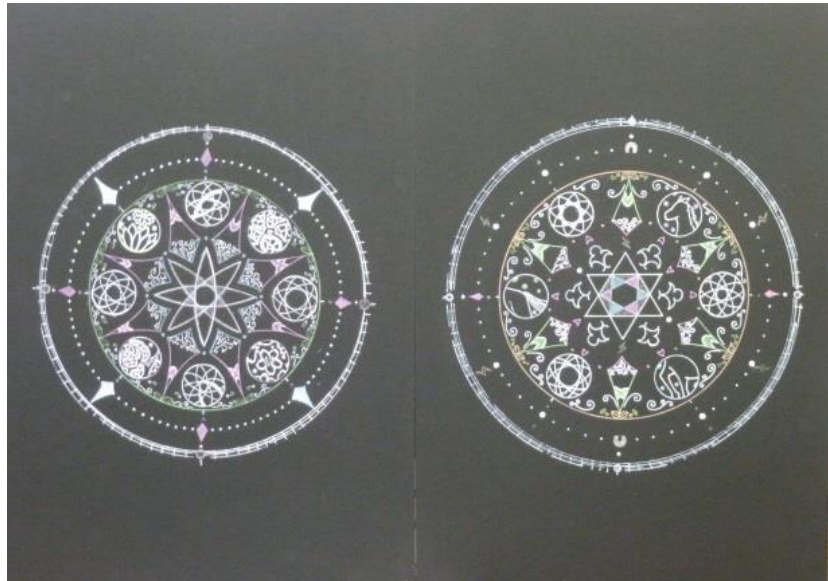
富山市立奥田中学校1年 高島 鈴羅



佳作(中学生の部)

「締めない心」〈題材「劔岳 点の記」〉

富山市立速星中学校3年 宮本 陽世



佳作(高校生の部)

「つながり」〈題材「首里の馬」〉

富山西高等学校3年 中村 光愛



佳作(高校生の部)

「ただ君に晴れ」〈題材「君の臍臓をたべたい」〉

富山中部高等学校2年 高山 諒

【写真部門】



知事賞(中学生の部)

「明るい未来へ」〈題材「ドラえもん」〉

小矢部市立大谷中学校2年 林 莉玖



知事賞(高校生の部)

「あぶら火の光に見ゆる」〈題材「万葉集」〉

富山中部高等学校2年 羽根 千絵



金賞(中学生の部)

「笑おう！！」〈題材「笑わせえるすまん」〉

高岡市立牧野中学校3年 高橋 歩花



金賞(高校生の部)

「楽しさ隣る滝の音」〈題材「万葉集」〉

富山中部高等学校2年 尾崎 奏天



銀賞(中学生の部)

「青空を駆ける」〈題材「ドラえもん」〉

小矢部市立大谷中学校2年 高澤 伶綺



銀賞(高校生の部)

「群青」〈題材「おおかみこどもの雨と雪」〉

富山中部高等学校2年 日吉 勇喜



銀賞(高校生の部)

「つばめの親子」〈題材「おおかみこどもの雨と雪」〉

高岡高等学校2年 井下田 萌加



銅賞(中学生の部)

「生きる美しさ」〈題材「おおかみこどもの雨と雪」〉

富山市立堀川中学校2年 氏家 雅晴



銅賞(中学生の部)

「水泡なる時」〈題材「万葉集第20巻 4470番歌」〉

氷見市立北部中学校3年 松木 蘭々



銅賞(高校生の部)

「蟻の思いも天に届く」〈題材「富山わがまちこー一番」〉

泊高等学校3年 紙屋 羽海



銅賞(高校生の部)

「隠れた想い」〈題材「おおかみこどもの雨と雪」〉

富山南高等学校1年

秋山 莉奈



銅賞(高校生の部)

「雪が降ると」〈題材「詩集雪道「雪が降ると」」〉

高岡第一高等学校2年

安土 空輝



佳作(中学生の部)

「大米騒動」〈題材「大コメ騒動」〉

小矢部市立大谷中学校1年 加納 彩音



佳作(中学生の部)

「昔の人々に感謝して」〈題材「劔岳 点の記」〉

小矢部市立大谷中学校3年 加納 涼成